二〇二二年一一月一一日

指先に触れて冷たき花梨の実　澄子
ウエルカムとて客待ちの雪だるま　あひる
胃カメラは金輪際とおでん食ぶ　千鶴
今日句会リュックに詰める庭蜜柑　こすもす
泣き声にカメラ傾く七五三　豊実

二〇二二年一一月一〇日

地蔵堂裏に薪積む冬初め　なつき
七五三待ちてすやすや写真館　智恵子
うまそうに林檎をつかむ象の鼻　豊実
芋掘りの子らの犇めく畑一枚　みきえ
豆腐屋の喇叭の余韻小春空　せいじ

二〇二二年一一月九日

薪割りの乾きし音や寒日和　みきお
ストーブに少女顔なる老母かな　あひる
蔵元の軒伝ふ湯気寒造　みきお
妻娘姉妹と紛ふマスク顔　たかを
弔辞書き終へたる窓辺冬の虹　ひのと

二〇二二年一一月八日

月蝕を厨の窓に熟柿吸ふ　素秀
蝕の月いま勾玉となりにけり　むべ
秋送りきたる遊子の旅メール　せつ子
満月を抱擁したる地球影　みきえ
赤銅の月刻々と蝕すすむ　千鶴
月蝕や信長生きし時を経て　きよえ

二〇二二年一一月七日

堂縁を占めて白菜干されけり　智恵子
あし抜けば片足残る蓮根掘り　みきお
ふきん縫ふ指は骨太一葉忌　素秀
足袋脱げば五指寛いでをりにけり　ひのと

二〇二二年一一月六日

神主の走る境内七五三　豊実
あひ会釈して道譲る秋山路　むべ
冬灯し湯宿に古りし雑記帳　なつき
長き夜の書架より垂るゝ栞紐　ひのと
就農の子の丹精の芋といふ　たか子
さわやかや屋号で呼び合ふ城下町　澄子

二〇二二年一一月五日

ひび継ぎし曇りガラスに冬日満つ　なつき
岩肌に紅葉貼り付く小糠雨　みきお